



京都、瓜生山に抱かれた “芸術立国”のための一大拠点。

近年、様々な場で京都造形芸術大学の名前を耳にする機会が増えた。アートの世界だけに限らないユニークな活動であったり、個性的な人であったり……。何か新しく、有意義なことに関わっている場合が多い。1977年、京都芸術短期大学として発足。建学の地は、今も本拠を置く京都の瓜生山である。背後には比叡山が控え、京都の市街地に臨む高台で創立者の徳山詳直は「京都文藝復興」と「芸術立国」というふたつの論を唱えた。前者は、学問と宗教、芸術と文化の都・京都の再生を通して日本の芸術文化復興を目指すものであり、後者は、芸術を学ぶ者の力で社会を変革し、平和を実現しようというもの。その精神は、この大学に集う数多くの学生たちや教員たちにも受け継がれ、これまで大きな成果をいくつも挙げてきた。京都造形芸術大学は、伝統ある京都の地でアートを学び、社会をより良くできる人材を育てる唯一無二の大学なのだ。

全ての新生が参加する初年次プログラム「マンデイプロジェクト」は、この大学らしい取り組みだと言えるだろう。学科横断の混合クラス編成で、約40名1クラス。毎週月曜日に開講されるこのプロジェクトは、講義ではない。ワークシヨップという体験型の授業。頭だけではなく体で体験し、様々なことを学ぶ。既存の枠組みから抜け出し柔軟な視点を獲得することを目的に、考え方を考え出し、作り方をつくり出すなど、100種類以上のワークシヨップが用意されているのだ。

1年生の9月には、マンデイプロジェクトの2週間にわたる集中制作で、クラス対抗による「ねぶた」の制作がおこなわれる。入学後半年間の学びを全て活かして、グループでの長期制作やアイデアのクオリティ、ディテールへのこだわりといった高いハードルを次々と越えていく。自分の体よりはるかに大きなスケールの制作に限られた日数で挑む学生たち。完成後に実施さ

れる点灯式・表彰式では、力を尽くしてきた学生たちの熱気と達成感に包まれるのだ。大勢でひとつの作品をつくることの困難さが体感でき、他の学科・コースの学生との交流も図れるマンデイプロジェクトは、教育さえも産業になりがちなこの時代に、学びとは何かをあらためて認識させてくれる機会となるだろう。

京都造形芸術大学には、学生だけでなく、一般の方が美術や伝統文化を学び、楽しむ場所も存在する。秋の学園祭や年度末の卒業制作展などで学生の作品が展示されるギャラリー・オーブや芸術館。歌舞伎などの公演がおこなわれる「春秋座」と現代演劇・ダンスのための小劇場「studio21」で構成された京都芸術劇場。初夏には瓜生山薪能が開催される野外能舞台「楽心荘」には、公演ごとに多くの市民が訪れる。また、図書館やカフェ、学生食堂も一般に開放。京都造形芸術大学は、人々に開かれた大学でもあるのだ。



左/京都瓜生山キャンパスの中心施設である人間館。ギャラリー・オーブや芸術館などの展示施設も入る 右/豊富な自然が残る瓜生山。ジャングルのように多様性に満ちた植生は、多彩で個性的なこの大学を表しているかのようである

